

特別支援学級の教員が抱く困難さと その対応についての研究

——発達障害の児童の支援の現状と課題——

塚 本 瞭

発達障害の児童が増えてきているという現状の中で、特別支援教育が開始され、発達障害も支援対象になった。その影響を特別支援学級の教員はどのように感じて支援をしているのか、特に担当児とかかわることでの困難さや学校体制についての現状について焦点をあて、現場の声を聴くために面接調査を行った。

本研究は、特別支援学級の教員の困難さを探り、教員への支援の手立てを検討することで教育現場における発達障害児の支援への困難さを軽減することにつながると考えられること。また、発達障害児の支援への困難さの軽減が児童自身の成長や肯定的な変化へと結びつくと考えられることの2点を目的とする。

研究協力者は7名であり、その内6名女性、男性1名で、面接の分析方法は修正版グラウンデッドセオリーアプローチを用いた。

その結果、担当児の障害特性から起因する困難さ（心理的負担）と学校体制での（システムの）困難さに大きく二分することが考えられる。

心理的な困難さの対応として挙げた「誰かに相談する」と、学校体制での困難さの対応として挙げた「校内連携」は双方向に影響を与え、教員の心の整理、担当児に合った支援体制を実施することで「担当児が肯定的な変化」をし、その変化を「体感すること」で教員の達成感・やりがいにつながると考えられる。担当児の成長と教員の困難さの軽減はつながっていることが考えられる。この構図を作るための手立てとして「校内連携の雰囲気作り」、「専門家の設置」、「教員のかかわりでの気づき」を高めるが考えられる。「校内の雰囲気作り」で相談しやすい雰囲気、情報交換しやすく校内連携が取りやすい雰囲気を作りチームで担当児・教員を支えることにつながり、相談する相手が専門家であるとより安心感を得たり、適切な対応が見出せ、担当児の変化が見つけやすくなることにつながるであろう「教員のかかわりでの気づき」は担当児の肯定的な変化を気づく力をつけることであり、小さな変化をも気づき感じ取ることができると、教員のやりがいにつながると考えられる。

今後の課題として、この手立てを実施するための働きかけについての研究が必要であろう。また、細かい障害別での支援の困難さについての研究も必要であろう。